「インドの昔話」の成立と 19世紀末イギリスの民俗学研究(1)

難　波　美和子

彼[クライトン]が知っているような名誉は、頭の回転と友の助力で得ることが出来るが、彼の信じるかぎり、研究だけが――それに賭けた学究生活を示す論文こそが――彼がもう何年も、アジアの奇妙な儀式や知られざる風習についての研究報告を持って叩きつづけている[王立]協会のドアを開ける鍵なのであった。

ラドヤード・キップリング『キム』*1

この論文は、イギリス人が文学においてインドをどのように表現してきたかを、「文学」周辺のテキスト、旅行記、博物学、科学思想などの言説との関わりの中で明らかにしようとする試みの一部である。

1．はじめに

19世紀半ばにFolktale（昔話*2）研究がヨーロッパ各国で形成されていったとき、インドとその宗教的・世俗的古文献類が、昔話の起源や分布、昔話が存在することの意味の解釈において、重要な役割を果たしたことは間違いない。当初昔話の分布は、インド・ヨーロッパ語族の広がりに重なると考えられた。一方、昔話を人類普遍の神話の零落とみなした比較神話学は『ヴェーダ』の解釈を抜きには考えられず、昔話の起源をインドに求めるベンファイらの「学説は次の二世代の学者たちにとって重要な意味を持つことにな」*3った。

民間説話集を集中的に比較研究する時代が始まった。それは近代の民間説話研究のまぎれもない始まりであった。こういった研究の基本的な仮説は、ヨーロッパのすべての物語の源泉をインドと断定することであったが、彼らの努力が実際に正しい結論を指し示していたかどうかはとも

かくとして、この刺激のもとに膨大な類話が集められたことは永遠に残る収穫であった。[*4]

昔話のいわゆる「インド起源説」は広い範囲の詳細な文献研究とともに、昔話のテキストを精密に収集し、分類するための方法論の必要も生じさせた。収集と比較研究の累積が、昔話の分布におけるインドの重要性を確認するとともに、それをすべての「起源」とすることや、昔話がインド・ヨーロッパ語族共通の基盤から発したとする理論の問題点も明らかにしていったのである。

これらの説の当否の議論において、同時代のインドの口承の昔話がどのように参照され、位置づけられたのかという問題は、十分に解決されていないように思う。インド起源論が支持される際も、反対される場合も、19世紀末当時に収集されつつあった口承の昔話には言及されることが少ない。しかし、ヨーロッパ人（特にイギリス人）によって行われたインドの昔話収集の多くは、ヨーロッパの昔話収集や学問的議論を十分に意識して行われたと考えられる。昔話とインドをめぐる学説と昔話のコレクションの関係を検討することにより、「インドの昔話」が形成された過程を、19世紀末から世紀転換期の人種論、神秘主義におけるインドについての言説の中に位置づけることができるだろう。

2．Folktale の認知とインド起源論

さまざまな場で人々を楽しませ、人から人へと口伝えされている「はなし」を聞き集め、より大きな「はなし」の枠に組み入れて編集することは、口承しか知られていない社会でも行われていたはずである。長大な叙事詩は書記化される以前にそのような歴史を経てきたと考えられている。書記法が広まると、「はなし」はその知識を持つ人々によって書き留められ、文字テクストとして後世に残ることになった。たいていの文字文化で、語られたはなしを書き集めた書物が見られる。各地に宗教的・世俗的な多くの説話集が残されていることからも、昔話を集めて残すという行為自体は新しいものではない。

しかし昔話自体を目的とし、研究の対象とした収集はヤーコプ・グリムとウィルヘルム・グリムの『子どもと家庭のためのメルヒェン集』に始まるとされている。彼らの成果は同時代のヨーロッパの文脈において、民族の特徴を現すものとして昔話を位置づけ、国民国家形成とともに自国内の昔話を採集する契機となったといえよう。特に豊かな昔話の存在は、国家内の小地域に自己のアイデンティティを確証するものとして働いた[*5]。

しかしすでにヤーコプ・グリムも述べていたように、それらは民族の特徴だけを持つものではなく、ヨーロッパ各地、そして更に外部の地域とも共通点を持つ。この時点では、昔話というジャンルはインド・ヨーロッパ語族に特有のものとみなされていたので、彼らの移住にしたがって、昔話も拡散したと考えられた。最古の昔話の所在地は、ヨーロッパにおけるサンスクリット研究の結果、古いインド・ヨーロッパ語を残すインドに仮定されたといえる[*6]。この説は昔話がインド・ヨーロッパ語族の影響が見られない地域にもあることが確認されることによって反駁されたが、それによって新たな「どこからどのようにして」広まったのか、という問いを発見する。

それに対する答えが、ベンファイの「インド起源説」であろう。最古の言語と最古のはなしが結びつくことは自然なことに見えるが、昔話というジャンルがある起源から世界中に広まっていったという単一、一回限りの発生説は「はなし」だけを独立したものとして文献相互の成立関係を追跡する発想から出発している[*7]。伝播における口承の重要性を認めながら、存在の証拠としては文献を上げざるをえないからである。インド・ヨーロッパ語から浮遊した昔話には別の伝播方法が必要となり、交易による人の移動、征服や文献の翻訳が想定されたのである。

単一発生説は、当てはまらない例を挙げていくことで否定され得る。したがって、エジプトの文書の解読[*8]によるより古い昔話の発見がインド起源論に決定的な反証となったと記されたり、アフリカやアメリカ大陸からの新情報がインドのみに起源を置くとみなせないことの証拠とされる。しかし、後でみるように、これらはインド・ヨーロッパ理論にせよ、インド起源説にせよ、これらによって決定的に反駁され、存在価値を失っていったとは考えられない。むしろ起源をより古く設定することによって、同じ例が補強の証拠として利用されることさえあった。インドから遠く離れた地域で語られた「はなし」であれば、どのようにそこにたどり着けるのか、あるいは、個別に発生したと考えるかは人類の文化についての当時の理解を離れては論ずることはできない。一方、インドで口承の昔話に直接出会った人々は、理論にどのように対処したのだろうか。

3．インドの昔話収集と Fairy Tale

インドでイギリス人が口承の昔話を収集して公刊した最初の例は、Mary Frere による *Old Deccan Days, or Hindoo Fairy Legend*（1867）であるとされている。旅行記などに伝承が紹介される場合と異なり、Frere は意図的に昔話を聞き書

きした[*9]。Mary Frere は当時マドラスの行政長官であった Bartle Frere の娘である。1881年の第3版の序文で、彼女は聞き書きの状況をおよそ以下のように説明している。「彼女は父の管内視察旅行に随行している間、Lady は自分一人で話し相手がいなかったので、乳母（ayah）の Anna Liberata de Souza[*10]に fairy tale を話すよう頼んだ。ブロークン・イングリッシュで語られるはなしを Mary Frere が書き留めた。」これらが Bartle Frere の序文と注釈をつけて出版された。彼はその「はなし」の中に、バラモン的でない民衆的な文化を見出している。彼の序文にはヨーロッパとの類似性に関する記述は見られず、むしろインド内における地域性や階層による違いに注意を促している。第3版の序文に至って、Mary Frere は文献との相似に言及することになるが、初版ではインド起源論を始めとする理論への認識はうかがえない。むしろ、M. Frere と de Souze の間にみられるものはグリムの『家庭と子どものためのメルヒェン集』にみられるスタイル、語り手と物語る行為の発見の物語である。

この本の出版の動機は何だったのか。1850年代から60年代はイギリスにおける fairy tale の復権の時代であるといわれる。1860年代には、fairy tale の要素をもつ代表的な児童文学のいくつかが発表されている[*11]。Frere の意図は文献的なインドの昔話をめぐる論争に加わろうとしたものではなく、fairy tale の流行の中にエキゾチックな物語を紹介しようとしたものであったかもしれない[*12]。

その後に、やはりインドにおけるイギリス人行政官の娘であった Maive S. H. Stokes の India Fairy Tales（1879）がつづくことになる。彼女の父はケルト研究者でもあった[*13]。昔話はヒンドスタニー語で語られたものを、Stokes が英訳した。語り手はヒンドゥー教徒の乳母（ayah）たちとイスラム教徒の男性の召し使いである。ゆえに、Frere のキリスト教徒の語り手よりも、よりインド的であるとみなされた[*14]。

Maive Stokes に限らず、Mary Frere、そして後の Georgiana Kingscote も同様に、そのインフォーマントは家庭内の召し使いだった。このことは、彼女らのインドにおける体験の範囲を物語っている。家庭内の召し使いとの昔話を通じた体験は、差異の衝撃をやわらげるピクチュアレスクの役割を担ったのだろうか[*15]。官吏の妻であった Flora Steel の場合には、夫の視察旅行に随行した際、村の女性たちによる歓迎の場で、子どもの語り手から聞くことになる。ここでは昔話は家庭とエキゾティシズムを結び付け、支配関係を侵害しない。

ところで、1846年にドイツ語の Folkskunde の訳語として Folk-lore が作られ、

antiquairy の概念のうち昔話や振舞いに関わる部分を引き継いだ。1840年代から50年代にかけて、Max-Müller が、ドイツの比較言語学を英訳によって紹介したが、その中には F. von Schlegel の、インド・ヨーロッパ語族には非常に古く遡る共通の文化祖型があり、あらゆる文化がその影響を受けているという主張があった[*16]。これによれば、遠い地域でさえも、古代の繁栄したインドの文化の影響を受けているはずであって、インド・ヨーロッパ語族以外の文化に類似した昔話や文化の要素が見られることは、それがインド起源でないことの証明とはならないのである。1863年、Kelly の *Curiosities of Indo-European Tradition and Folk-lore* が、遠い祖先に溯る共通の文化という概念を Folk-lore に持ち込んだ[*17]。インド・ヨーロッパ語族が世界へ拡散する出発点はヒマラヤか中央アジアの一角に想定され、それはやはりシュレーゲルの影響を受けた神秘主義が人類の原郷とする場所と一致する。一方、進化論的立場にたつ E.G.Tylor の残存説[*18]を Andrew Lang らは昔話に適用した。彼らはヨーロッパとインドに共通の「はなし」があるのは伝播したのではなく、人類共通の祖先が持っていたものが、現在まで残っているのだと考える。

こうした議論の参加者たちによって1878年、ロンドンで Folk-Lore Society が発足した。この団体は Folk-lore 研究の方法論の確立や、研究発表の媒体として機能し、多くの private scholars の交流の場となった。ここで「未開人」の folk-lore がイギリスの過去と比較されたり、起源が議論された。主要なメンバーの１人である Andrew Lang は主として残存説を支持し、伝播も否定しないという中庸の態度を示し、彼の見解はこの時期のインドの昔話収集者に受け入れられたように見える[*19]。

しかし、伝播説の支持者も会員の中にはいた。たとえば Joseph Jacobs は「すべてではないが、ほとんどの folktale はインドに起源を持ち、ヨーロッパに口承と書物の両方で、ペルシアやパレスティナ、中央アジアを通って伝播した」と主張した。Jacobs は Frere 以来のインドの昔話のコレクションや古典文献からの選んだアンソロジー[*20]を編み、注釈で、その主張を展開する。この中では Temple が紹介した Raja Rasalu も、ヨーロッパに伝わって、トルヴァドールの歌うロマンスになったと説明する。彼は仮定された伝承のネットワークと、文献によるインドからの伝播の過程を説明し、それが、Lang らが主張する人類学的な残存説よりも昔話の成立を説明するには合理的だと考えた。彼の支持にもかかわらず、アラブ人やユダヤ人、モンゴル人やトルコ人をヨーロッパへの伝播の媒介とするようなインド起源説は、インド・ヨーロッパ理論のように支持された時期があるのかどうか、疑問である。インド起源説の

別称としての伝播説は、ジャータカやパンチャタントラのような説話集そのものの翻訳伝播ではなく、個々の「はなし」毎に成立や伝播を考えるという発想に引き継がれることによって消滅したといえるのではないだろうか。

その間、インドの昔話の収集は Frere 以後、確実に増加している。1872年に創刊された *Indian Antiquary* には Folksong や Ballad のようなジャンルのほか Legend, Story など、のちに Folktale として分類される項目が初期から見られる。1880年代には Folklore のタイトルのもとにインド各地の昔話が紹介される例が増えている。紹介者は軍人、官吏、宣教師などであり、ここで公表した「はなし」をまとめて出版する例がいくつか見られる。その1人、Richard C. Temple[*21]は、『キム』のクライトン大佐と同様に、様々の民俗慣習に関する論文や収集したバラッド、昔話を *Indian Antiquary* に掲載し、その編集にも携わった。彼は昔話の研究動向に関心を持っていた。Raja Rasalu というロマンスの主人公を歴史上の人物に同定し、「太陽英雄」であるという比較神話学の説を攻撃し、Flora Anne Steel とともに出版した *Folk Tales of Punjab*[*22]では、Folklore Society に自分が提案した初期のモティーフ分析を試みている[*23]。

英語教育を受けたインド人もこの動きに参入する。たとえば Lal Behari Day は *Folk-tales of Bengal*[*24]を Temple の勧めによって書いた。序文によれば、彼の自伝的小説に近所の老女に Folktale を聞く場面があるのを Temple が注目したためである。その場面には昔話は語られておらず、Day は記憶を探ったり、古い友人に聞いて回らねばならなかった。そのような忘れられかかっていた昔話を公にする理由として、彼は次のように述べる。

> ...as I believed that the collection suggested would be a contribution, however slight, to that daily increasing literature of folk-lore and comparative mythology which, like comparative philosophy, proves that the swarthy and half-naked peasant on the banks of the Ganges is a cousin, albeit of the hundredth remove to the fair-skinned and well-dressed Englishman on the banks of the Themes, I readily caugt up the idea and cast about for materials.[*25]

彼は比較神話学を、インドとイギリスを民族の「血縁」として言及する根拠とする。ここでは昔話はインド人とイギリス人の差異を解消する可能性を与えられている。このような「近さ」の表明は Day 以外には見られないように思う。インド・ヨーロッパ理論やインド紀元説に言及する場合も、インド人とイギリス人の近縁性は記述されない。

カシュミール地方でカシュミール語辞典の作成と昔話収集を行った宣教師Hinton Knowlesは、インド・ヨーロッパ理論や比較神話学説に言及するが、支持からは身を避ける。むしろ、彼はおそらく宣教師としての経験から、近代のヨーロッパのインドへの影響を考慮する。

> Europe has doubtless lent a fancy to Asia. One or two books of Western stories have been published in India. Greek fables are supposed to have exercised an influence on the Indian mind. European officials, missionaries, and others may have rendered a legend or story current in their districts. *26

インドの昔話としての純粋さの継承が、孤立した集落に求められ、昔話はイギリスとインドとの間の緩衝材のようだ。彼らのように、インドに住み、様々なインドの習慣に触れながら昔話を収集する人びとと、イギリスのFolklore研究者との間には、昔話の成立をめぐる感覚的なずれが存在していないだろうか。サンスクリット文献とヨーロッパの昔話の距離を測る研究者と違って、インド起源説は収集者にとって、強い動機付けとはなっていない。Kingscoteの次の言葉は、両者の間のずれを象徴するものだろう。

> In Germany we have Godeck, Kohler, Sichecht, and a host of others who tell us that these tales are Oriental, and that all fable originates in the East, others again that they are transmitted to us by the same channel as the Aryan languages from Ariya tradition I cannot see why one nation or one country alone should have the intelligence of producing fables which as a rule are next to religion in their teaching and intentions.*27

だがもし、クライトン大佐のような野心を持っていたなら、Folklore Societyが問題とするような、インド起源論か残存説かといった議論に参加しなければならなかったに違いない。

注

*1　ラドヤード・キップリング『キム』（斉藤兆史　訳）晶文社、1997年、p.186.

*2　Folktaleの訳語としては、「民譚」「民間説話」「民話」なども当てられてきたが、ここでは昔話を用いる。

*3　S.トンプソン『民間伝承　下』（荒木博之、石原綏代　訳）社会思想社（現代教養文庫）、

1977、p.136. (S. Thomson, The Folktale, 1977, University of California Press (original 1946), p. 376)

*4 同上、p.142. (ibid. pp.378-9.)

*5 たとえば、バルト諸国、フィンランド、イタリアの諸州、フランスのブルターニュ、スコットランド、ウェールズ、アイルランドなどに顕著にみられる。この統合と細分化の問題はここでは触れない。

*6 サンスクリットの「発見」とインド・ヨーロッパ語族の構築は、古典古代の継承者の権利を彼らに保障し、ヘブライ語から人類最古の言語という地位を奪った。神の言葉はヘブライ語ではなくサンスクリットであり、ヨーロッパの言語のほうが神の言葉に近いという含みをもつ。

*7 ベンファイは現在で言う動物昔話についてはイソップのようなヨーロッパのテキストをインドに先行するものとし、本格昔話をインド起源としていることも文献による証拠に基づく。

*8 シャンポリオンのヒエログリフ解読は1822年であるから、もっと古い言語としてのエジプトの言語の認知は昔話のインド・ヨーロッパ説と平行していた。しかし、なぜかこの時、昔話の起源地をエジプトに変えはしなかったようである。

*9 まだ folktale という言葉は定着していない。Frere は fairy legend と記している。fairy tale はドイツ語の Märchen の訳語として用いられている。

*10 B. Frere の説明によれば、"a daughter of Christian converts who belong to the Lingaet caste of the Mahrata country"

*11 『水の子』(1863)、『不思議の国のアリス』(1865)、『北風のうしろの国』(1868)、『お姫さまとゴブリン』(1872).

*12 Mary はインド生まれ、インド育ちであったので、どのようにこうしたこうした流行に接したかは、現在は不明である。彼女にとっては fairy tale は創作文学を連想させるので、fairy legend を使ったのかもしれない。

*13 Whitley Stokes. (ちなみに Bartle Frere も、ウェールズの Brecon 出身で、ウェールズの習俗に自覚的だった。)

*14 R.M.Dorson, *The British Folklorists*, 1968, 335-336

*15 S.Suleri, *The Rhetoric of English Indid*, 1992, pp.75-110. (M. Frere の動機に「退屈」が言及されていることにも注目すべきだろう)

*16 F. von Schlegel, *On the language and Wisdom of the Indians*, 1849. European Discovery of India, key ladological Sources of Romanticism, vol. 4. 2001)

*17 Gomme Folklore Relics of Early Village Lige 1883 p.3

*18 Tylor, Primitive Culture.

*19 「それ［ラングの結論］は民間説話の研究が19世紀の終りまで到達した立場を語る

ことにほかならぬのであり、それはほとんど修正されることなく20世紀へと持ち越されていったのである」（S.トンプソン、p.145., Thompson, p.380）

*20 Joseph Jacobs, *Indian Fairy Tales*, 1892, Preface Notes and Reference.

*21 Richard Carnac Temple (1850-1931), インドのアラハバード生まれ。第二次アフガン戦争に従軍。corps officer（参謀将校）として軍務につく一方で Folklore 研究を行い、退役後、ケンブリッジ大学 Trinity Hall のフェローとなった。

*22 Flora Anne Steel, notes by R.C. Temple, *Folk Tales of the Punjab; Told by the People*, 1892. (Encyclopaedia of Indian Folk Literature, vol.1, Cosmo Publications, 2000.) 挿絵は R.キップリングの父、J. Lockwood Kipling。

*23 1890年代以降の収集には形式の統一化が見られる。これは Folklore Society が呈示した収集法、記録すべきデータが Folklore Journal などを通じて周知されたためと思われる。さらに Folktale の共通基準に基づいた分類の試みは、Knowles のテキストにも試されている。この分類法は The Handbook of Folklore (1890) に提唱されているが、その第二版（1914）では省略されている。この後、フィンランド学派の A.Aarne による分類方式が受け入れられていく。

*24 Lal Behari Day *Folk-tales of Bengal,* (Encyclopaedia of Indian Folk Literature, vol.4, Cosmo Publications, 2000.)

*25 Day, viii.

*26 H.Kaowles, Folktales of Kashmir, 1892.

*27 Georgiana Kingscote and Nayesa Sastri, Tales of the Sun or Folklore of Southern India, (Encyclopaedia of Indian Folk Literature, vol.3, Cosmo Publications, 2000.)